

令和3年度 千曲市総合教育会議 議事録（要約）

1. 日 時

令和3年7月28日（水） 午前11時から午前12時

2. 場 所

千曲市役所 応接会議室

3. 会議日程

- (1) 開会
- (2) 市長あいさつ
- (3) 会議事項
- (4) 閉会

4. 議 題

- (1) 不登校について
- (2) その他
 - ・通学路の安全対策
 - ・コロナ禍の学校の取り組み

5. 出席者

市長	小川 修一	
教育長	小松 信美	
教育長職務代理者	若林 由美子	
教育委員	坂本 孝夫	
教育委員	中村 洋一	
教育委員	宮入 文雄	
教育委員	松田 祐子（欠席）	
教育部長	島田 栄一	
教育総務課長	高野 昌一	
教育総務課	伊藤 和也	大橋 和也
企画政策部長	齊藤 清行	
総合政策課長	宮尾 憲夫	
総合政策課	小笠原 隆	宮下 真人

6. 議事

1. 開会（進行：齊藤企画政策部長）

2. 市長あいさつ

（小川市長）

令和3年度千曲市総合教育会議の開会にあたり、ごあいさつ申し上げます。

今回主な議題として取り上げますのは、「不登校問題について」でございます。不登校は社会的に大きな問題となっておりますが、不登校の児童・生徒は全国的に増加を続けています。千曲市においても同様の傾向でございます。

また、社会が多様化する中で、それぞれ不登校の理由も違うなど、画一的な解決方法を見つけることは非常に困難であると考えております。

しかしながら、学校教育の中で社会性や道徳などの人間性を培い、たくましい体力をつけることなど、子どもが成長するうえで欠かすことができないものでありますので、市としても子どもが真ん中という考えの中で、しっかりとしたサポートをしていくことが必要であると考えております。

本日は、委員の皆様と議論をさせていただく中で問題点を共有いたしまして、何が必要か、何をすべきかといったことを確認したいと考えておりますのでよろしくお願ひいたします。

以上、簡単ではございますが、本日の挨拶といたします。

3. 会議事項（進行：小川市長）

（1）不登校について

（小川市長）

資料をご覧くださいと、年々不登校の児童・生徒が増加していることが分かる。特に平成30年からは長野県が全国を上回っており、中学生を見ると令和元年には千曲市も全国を上回っているのが気になる。

教育長をはじめ委員の皆様は、この点について要因等、市の教育委員会として何かお考え、率直なご意見等をざっくばらんに頂きたい。

（小松教育長）

資料には不登校の主たる要因がまとめられている。年度は定かではないが、以前は主な原因として教職員との関係や友達との関係が多かった。しかしこの資料では、親子の関わり方が二番目に多い理由となっており、無気力・不安という理由が最も多くなっている。教育委員会としては、このあたりを考えていく必要がある。

この中で、不安については息切れ症候群というものがある。小学校で非常に良い子で、精一杯活動してきた子どもが、高学年になった時にエネルギーを使い果たしてしまい休みに入る傾向が出ている。そうなるきっかけは子どもによって様々だが、その辺がその子にとっての不安になるのではと考えている。

これらは Q-U（楽しい学校生活を送るためのアンケート）のデータを見ると、そのような傾

向が出てきていることが感じられ、大事にとらえていく必要がある。

不登校の要因は様々で、それに対してどのような対応をしているかもまとめてあるが、これといった決定打がないというのが現状であり、心配しているところ。

(宮入委員)

自分が教職の現場にいた頃の一番の不登校原因は、担任と子どもの関係だったが、今はそれが減ってきている。

不登校は学校に何か嫌なことがあるから来れない。それが無気力・不安となっている。

もう一つ、親子の関係も多いため、学校としては懇談会や授業参観後の話し合いなど、親への対応も考える必要があるのでは。

(若林教育長職務代理者)

高校につながっても中退したり、それ以前に小中学校で学校に行けなくなってしまい、外と遮断されたような子どもたちが、成長しても社会参加ができないといったことがある。

そういった子どもたちのことを考えて不登校の要因を見ると、家庭環境や親子関係の中で自己肯定感が低く、そこまで気持ちがいかないなど理由がくっきりしている気がする。

学業の不振という理由には発達障害も関係しているのではと考えている。

資料を見ると、不登校の子どもは小学校高学年になると増加し、中学校になるとさらに増えている。思春期前から思春期にかけて、子どもたちの心が揺らぐ時期に大きな役割を果たす家庭環境が重要。

そのためには、若い世代が親になり子どもを育てていくための教育を、市として取り組まなければならないと思う。

真面目な子どもが糸が切れたようになってしまう現状をみると、家庭での育ちに要因があると感じる。

(小松教育長)

良い子を求めすぎているのではないか。教員としても良い子はやりやすい。

(若林教育長職務代理者)

大人の要求に応え続けて良い子になってきたが疲れてしまう。

(宮入委員)

資料を見ると色々な対策をすでにやっている。それでも不登校は増えている。

(小松教育長)

小学校にはふれあいルームが一つある。中学校は各校に中間教室を設置して対応している。そこに来てくれる子どもはまだ良いが、ずっと自宅にいる子どももいる。その場合は家庭訪問などでつながりをつけたりしているが、なかなか難しいところがある。

(中村委員)

不登校の問題はデータで見れるものと見れないものがある。

令和元年に千曲市の小学生の不登校が増えた理由として、コロナの影響で遠隔授業等もあり、国と県のデータがまだ出ていないが、おそらく同じように増加しているのではないかと。

不登校を解消するための努力をすることは重要だが、小中学校で不登校がゼロになったということだとどまっていたら大きな社会変革はできないと思う。

資料でも義務教育終了後の見届けに課題があるとなっているが、義務教育後の方が長い。

不登校を経験した人たちが、言葉は良くないが立ち直って社会復帰していくためには、義務教育終了後の対策を見据えていく必要があると思う。

高校に進学してから連絡がないということだが、定時制の高校は中学校と非常に密に連絡をとっている。そうした中で、高校以上の受け皿が必要。

遠隔地から通学する生徒も多く、それだけで大変になる。地元でそういった受け皿となる高等教育機関があることが重要。

日本はアメリカなどと比べて、やり直しの教育の機会が少ない。不登校を経験すると、そのまま家庭に引きこもって家族に迷惑を掛ける状況になってしまう。しかし、一念発起してやってみようという人もいる。そういう人たちの学習の場を確保する必要がある。

高校再編の問題もあるが、千曲市の地元で受け皿があり、いつでも頑張れるようにバックアップするので心配ないという体制づくりも必要では。

屋代南高校のあり方の一つとしても、この問題とは切っても切れないところがある。

義務教育が終わってからのの方が長いことを肝に銘じて対策する必要がある。

(若林教育長職務代理者)

以前にあった県教委との会議で、これまではどうしたら学校に来れるかということを中心として対策をしていたが、今は受け皿のことを含めて多様な関わり方をするようになってきたし、県教委もその方向で進めているとのことだった。

学校だけが進路ではないという時代になり、受け皿や受け止める人、途中で心配してくれる人が必要になってきているため、そういった場所や人材の確保を考えなければならない。

(坂本委員)

資料から三つのことが分かる。

この不登校の問題は将来的に減ることはないというのが一点目。

小学生の不登校と中学生の不登校を比べると、中学生は約5倍となっており、高校生になるとまた減るということで、中学生がピークとなるというのが二点目。

三点目は、不登校の要因。前半の8項目は学校生活に起因するものとなっており、続く3項目が家庭生活、最後の3項目が本人に起因するものとなっている。

この中で学校生活に起因するものは減りつつある。また、家庭生活に起因するものはブラックボックスとなっている。そして、本人に起因するものは多様性をもって対応する必要があるということ。

そうすると、学校生活に関することについては現状の取り組みで問題がないとなる。

しかし、家庭に起因するものと本人の問題に起因するものについては、指導者は一つの思考を持たなければならないと思う。

私は不登校というものを、集団や任務に対して心身がすくんでしまう状態であると思っている。

もう一つ別の側面から見ると、エネルギーがなくなる、充電切れになってしまうため充電してあげる必要があるというもので、対策は色々あっても中々正解は見つからないと思う。

ただ、心理学的な面から見ると、人間がこういった状態に陥った場合は、何か原因を取り除くという引き算の発想では駄目で、これをすれば学校に行けるのではという足し算の発想が必要であるというのが一つの方法論となっている。そのためみんなで足し算の発想でのアイデアを出していくことが重要。

もう一つ、具体的な内容として個人に起因する問題でも家庭に起因する問題でも、担任の家庭訪問は良いと思う。また、別室登校を進めていくべき。

さらに、友達とふれあう機会を増やすことや、不登校の子どもを持つ保護者を支えるシステムをきちんと考えておくことが必要ではないか。

(小川市長)

委員の皆様のお話しをお聞きして、かつての要因とは変化しており、学校生活に起因するものは千曲市の取り組みで対応できるのではないかとのご指摘をいただいた。

それ以外の要因については、今後高等教育機関も含めた受け皿が必要になってくるのではという方向性をお示しいただいた。

友人とのふれあいや担任の先生の家庭訪問などは受け皿を作ることとは別に、今の取り組みの中でカバーできるので、今まで以上に意識的に進めていく。

屋代南高校の話が出たが、市としては多様な学びを保障する、地元の子どものために多部制、単位制を設置したいと要望していくが、県教委が決めることであるため今後の動向を見極める必要がある。

市として多様な子どもを受け入れる、やり直しの機会をつくるということが必要となってくるが、フリースクールも誕生している。ただ、一方で費用が高額であるということも聞いている。

悩んでいる、困難な事情にある方のやり直しの機会を均等にするにはどうすべきかということも考えなければならない。

(宮入委員)

学校に行く意義を見いだせない子どもたちに、学校へ行く以外の選択肢を考えさせてあげることが大事。

今は端末の持ち帰りがかなり広がってきているので、そういったものを利用しながら自宅でもインターネットを使って学習できる体制づくりを進めることも一つの方法。

(小川市長)

コロナを機にオンラインの学習にも抵抗がなくなってきたので、メリットを伸ばしていく。環境も変わってきているので上手く対応していきたい。

(宮入委員)

高校進学者の動向について一切不明というのは問題。これからの不登校対策を考えるうえで、何か体制づくりが必要ではないか。

(小川市長)

確かに一切不明というのはいかななものかと思う。

(中村委員)

通信制や定時制を経て短大に来る学生もいるが、集団は苦手でも勉強をしたいという気持ちのある子どもはかなりの割合でいる。

しかし、そういった子どもたちの情報を定時制高校などに照会しても、個人情報保護の関係で回答は得られない。これは定時制高校から中学校に照会しても同様で、義務教育が終われば自分たちの手を離れるが、記録については秘匿する状況になっている。

これは社会問題の一つとしてとらえると、とんでもないことだと思う。

教育委員会の管轄ではないと思うが、市として体制を作り、長い人生の中でどう取り組むか考えるべき。

(小川市長)

資料にも家居の生徒はこども未来課へつなぐことが可能とあるが、教育委員会から離れた後、市の担当課でフォローする体制が不十分というご指摘をいただいた。

(小松教育長)

高校卒業後、生徒の状況を追跡できないことについて、保護者からの支援を望む声の中々つかめない。どうしたらつかめるかと考えるが、行政としては家庭の中に踏み込めないため支援の手が中々伸びない。この辺が非常に難しいところ。

中村委員のおっしゃった個人情報提供の壁をどのように打破するのか、個人の情報をどうすくい上げるかが難しい。ただ、やっていかなければならないことは確か。

(若林教育長職務代理者)

こども未来課の業務についても事前に確認したが、課の中でも様々な分野があり果敢にフォローしてもらっている。ただ、その中でも動向調査に対応できる部署を作っていただきたい。

そして、高校進学後の動向調査もルールを作る。個人情報も重要だが、子どもの未来にプラスになることであれば連絡をさせる。そういったフォローをしていくことが大事。

不登校などの心理的な経験を土台にして頑張る方もいるので、そういった取り組みが必要。

(坂本委員)

自身の経験だが、不登校は初期対応が大切だと思う。そのうち学校へ行くだろうという考えでは駄目。

(小松教育長)

おっしゃるとおり初期対応が重要。

たとえば良くないが、病気の際も医師の初期対応が重要。医療現場や災害など色々な状況で初期対応は非常に重要。

困っている家庭が学校に心を開いて語ってくれることと、学校の初期対応の両方が大事。ボタンを掛け違えると大変なことになってしまう。

(若林教育長職務代理者)

他県から転校して学校になじめない子どももいる。カルチャーショックが大きいのでは。

(小松教育長)

転校生については、最初は非常に気を使う。逆に気を使い過ぎても良くないが、それを本人が感じないようにしつつも大事にしていかなければならない。

(若林教育長職務代理者)

給食のおかずが苦手で食べられないという単純なことでも学校に行きたくなる子どもがいる。

そのため、あまりしつこく言わないようにといったやり取りを親と先生でして緩和していくことも必要。

(坂本委員)

特に小学生では、無理やり学校に連れていくとか叱責するのは良くないことだと思う。

(小松教育長)

小学生は自分自身で言葉にできないことがある。

(小川市長)

不登校は社会全体に関わる範囲の広い問題。

委員の皆様のお話を伺うと、早く相談する体制などの初期対応は、今ある市の取り組みの中ではスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーの活用を活発にしていくのが良いかと思う。

そして、行政とのつながりをしっかりしてもらい、何かあったらすぐに相談できる体制を作ることによって安心感を与えることが重要。

義務教育終了後の見届けについては、相談体制やその後のフォローをどうしていくのか行政として考えていかなければならないが、どうしても個人情報のはばりがあって難しい。この問題に限らず、行政に何か動いてもらうには基本的に申請が必要であり、追跡調査も行政が勝手にすることは難しいと思う。

逆に、市民から気軽に行政へ相談してもらう環境づくりが必要。教育に限らず、どんなことでも何かあれば行政に相談してもらう体制づくりに今まで以上に取り組んでいく。

課題は山積しているが、見届けやその後のフォローについてはしっかりと取り組んでいく。また、やりなおしの学習の場を設けることも、どのような形にするかも含めて研究していく。

(小松教育長)

総合教育センターに教育相談員を配置し、各学校を回って色々な相談を聞いているが、この辺を充実させ、よりきめ細やかに対応していく必要がある。

今年度は保育課にも相談員を配置し、保育園を中心に回っていただいている。教育相談員と連携し、情報共有しながら対応しているが、今後はコーディネートする人材も必要になる。そういった部分も工夫しながら進めていかなければならない。

(小川市長)

保育園の段階からスクールソーシャルワーカー的な方をおくなど、幼少期から市が関わっていくことが重要と考える。

(2) その他について

・通学路の安全対策

(小川市長)

通学路の安全対策について、先に千葉県で起きた下校中の事故に関連して、千曲市ではどのような対策をしているのか資料にまとめた。

先般、職域防犯協会からカメラの設置を要望された。このように具体的にカメラの設置要望が上がってきている。

すでに市で取り組んでいる安全対策もあるが、これについて教育長のご意見は。

(小松教育長)

八街市での事故の直後、各学校に対して通学路の安全に関する通知を出した。

その後、県教委からは八街市の例を踏まえて、抜け道になるような通学路や道幅が狭い箇所について重点的に確認するよう連絡があった。

これは学校だけの問題ではなく、国交省や建設課などの道路管理者や警察も関わってくるため、連携して進めていきたい。

グリーンベルトや歩道の整備など、学校からの要望を順序だて、調整しながら進める必要がある。

特に上山田小学校は細い道がある。

(中村委員)

そこについては心配しており、何度も地区や警察との交渉を進めているが、生活道路であるということでも中々進まない。

(若林教育長職務代理者)

教育長が校長時代に育成会の会議で通学路の改善についてお話されていた。その際、地元にもご協力いただきたいというお話をされたところ、区長や地元の役員の方から市に要望は上げていると怒られていた。上げてはあるが、優先順位が高いものから実施されているとのことだった。

すべては無理だとしても、本当に危ない箇所は予算化して即対応すべきではないかと思う。

千葉県の事故は酒酔い運転という特別な事情があるが、高齢者の運転などもあるし、国道の渋滞を避けて県道を抜け道として利用する方も多い。その中で登校をしているので、予算のこともあると思うが、スピード感をもって進めて欲しい。

(中村委員)

区長を通じて要望を上げても中々直らないので、通学路については教育委員会が別枠で予算をとってはどうか。

このような事故があつてからでは遅い。危険な箇所が分かっているのであれば、先に先にと積極的に対策をして欲しい。

(若林教育長職務代理者)

事故にあつて、子どもが亡くなつてしまえば教育以前の問題。非常に大事な課題。

(宮入委員)

各学校では通学路の危険な状態は調査して挙げてある。それをもう一度見直して、ここが一番というところは徹底して優先的にやってもらうということが大事ではないか。

(中村委員)

更級小学校の例では、見守り隊というものがあり、毎回親子で一緒に歩いてポールが切れている場所などを見つけると直接建設課へ話に行く。そうするとすぐに直つていたりする。学校の努力も必要だが、教育委員会としても積極的に通学路を回ってもらいたい。これは喫緊の課題。

(小川市長)

様々なご指摘をいただいた。

市行政では、地域づくり要望制度で、区や自治会から上がってきた要望の優先順位に沿って進めている。その中で通学路の安全対策は別立てにしてはどうかという意見があつた。こういったことに対応するスピード感が必要という意見もあつたが、その辺のあり方は行政としても検討が必要と考えている。

ただ、ハード面だけではなく、運転者のマナーが一番重要であるため、交通安全の意識を高めるように警察とも連携を取りながら進めていく。

どこかの担当課だけでやる問題ではなく、不登校問題と同様、市を挙げて関連機関とも連携してやっていく。この総合教育会議として、通学路の安全対策は最優先という考えがあることは分かった。

・コロナ禍の学校の取り組み

(小川市長)

コロナ禍での対応について、こちらも資料にまとめていただいた。こちらに関して何かご意見をいただきたい。

(中村委員)

教育委員会の定例会で、中学生のワクチン接種が始まると聞いている。ただ、保護者には色々な意見があり、中には子どもにはワクチンを打たせたくないという方もいる。その辺の配慮をしていただきたい。

私の勤務先では、学生の希望は6割から7割。成人はしていても、親御さんから副反応などを心配する声もあった。啓蒙と、反対に強制しないことに配慮しながら進めて欲しい。

(小川市長)

学生へのワクチン接種については健康福祉部長と打合せた。

市では、中学三年生と高校三年生を早期接種の対象とし、あくまでも希望する方にのみ接種していただく方針でいる。

啓蒙の仕方についても、ネット上には様々な情報が飛び交っており、不正確な情報を鵜呑みにしているケースもある。逆に厚労省の正確な情報も出ている。

市としては、あくまでも国や県の情報、基準に従って、希望される方には100パーセント打てる取り組みを進める。また、正しい知識の啓蒙を実施する一方で無理強いをしない方針で進めていく。

国からのワクチン供給が当初予定よりも遅れているため接種ペースも遅くはなるが、届いたワクチンを無駄にしないよう進めていく。

白鳥園の南側に集団接種会場を設置したが、エアコンも効いており、動線にも配慮されているため、スムーズに接種が行われていた。高齢者に比べ問診などに時間もかからないし、接種する方も直接車で会場に来るため接種自体の速度は速くなった。

(小松教育長)

学校のコロナ対策について、水道の蛇口は従来の回す形状のもの。今後コロナは終息というよりもインフルエンザのような形になると思われる。そのため、できる限り接触のない形状に段階的に切り替えることができれば良いと考える。

水道で手洗いする時が一番密になる。

(若林教育長職務代理者)

水道の数も限られている。

(小松教育長)

物理的に数は増やせないが、せめて非接触型の蛇口にしたい。

(若林教育長職務代理者)

蛇口の形状的に、学校の持っている予算で付け替えることはできないと聞いた。

(宮入委員)

学校の消毒作業は職員がやっているのか。

(小松教育長)

スクールサポーターにお手伝いいただいている。

(宮入委員)

教職員の負担軽減になりありがたい。

(小川市長)

蛇口の点検をして、修繕に合わせて段階的に取り替えていきたい。ウィズコロナで施設の整備も進めていかなければならない。

(宮入委員)

保護者は学校だよりなどで学校の様子分かるが、地域の方はホームページで確認するしかない。その際、ホームページの更新速度が学校によって差がある。更新の遅い学校は状況が良く分からない。

コロナ禍においても学校の様子分かるよう、ホームページの充実を図って欲しい。

(小松教育長)

分かりました。

(小川市長)

本日の会議は終了といたします。ありがとうございました。

4. 閉会